

学会受賞報告

第60回日本顎口腔機能学会学術大会優秀賞

第60回 日本顎口腔機能学会学術大会 優秀賞を受賞して

摂食嚥下リハビリテーション学分野 竹井 絵理

この度、平成30年4月21、22日に鶴見大学で開催されました第60回日本顎口腔機能学会学術大会において、優秀賞を受賞しましたのでご報告致します。今回、『米飯摂取時の食塊物性と筋活動特性』という演題にて、米飯摂取時の食塊物性と生体記録を並行して行い、嚥下時の食塊物性に絶対閾値が存在するか否か、これらの記録に世代間の差があるか否かについての実験結果を発表しました。

私は、学部学生時代には農学部で天然物有機化学を学び、企業では介護食品のテクスチャーについて研究開発をするなど、これまでヒトを対象とした研究の経験は皆無でした。摂食嚥下リハビリ

テーション学分野に在籍して以降、口腔内に入った後の食品のテクスチャーの変化や、健常者でさえも個人間で大きく異なる咀嚼嚥下機能について知ることがどれほど大事かを痛感し、新たな気持ちで学んでいるところです。

今回の受賞を励みに、今後の実験に精進いたします。データ採取から解析・発表に至るまで分かり易くご指導下さいました井上誠教授をはじめ、若年者データをまとめられた前田留美子先生、また医局先生方、ご協力いただいた被験者の皆様に心より御礼申し上げます。また、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願いいたします。



日本顎変形症学会学会賞受賞講演を終えて

歯科矯正学分野 高橋 功次朗

こんにちは。矯正歯科の高橋と申します。この度、今年の春に驚くべき連絡（メール）が私の元に届きましたことをご報告いたします。事務局からのメールは私が以前投稿し、掲載された論文が学会賞を受賞したので、6月に開催される第28回日本顎変形症学会学術大会にて招待講演として、受賞記念講演を是非お願いしますとのことでした。場所は大阪であり馴染みがない場所なので、参加させていただく分にはありがたいなと思いました。しかし、私は昔から人前に出て何かプレゼンするのが苦手というか、あまりそういった機会もなかったので、数ヶ月後の発表のことを思い、早くも緊張感マックスの状態となりました。また、私の学位研究は基礎系でしたので、ほぼ初めての臨床研究がこのような譽れに預かることになろうとは夢にも思いませんでした。論文タイトルは「骨格性下顎前突症例における下顎単独後退術の下顎後退量の左右差と正中部移動量との関係」というなかなかマニアックなものです。再度緊張してきました。というのも、通常、論文を読んでもくださる方は興味があって検索し、読んでくださるといった流れなのでしょうが、本番当日は色々な先生方がいらっしゃる中でわかりやすく伝えなければならないミッションだなと思ったからです。さて困りました。しかし、一番初めにこの研究を始めるきっかけとなったエピソードから思い出し、プレゼンテーションを作るしかないなと腹をくくりました。以下回想です。

ある日の深夜。技工室にて、私は顎変形症の患者さんの診断に関していつものように頭を悩ませておりました。そこにふらっと先輩である丹原先生が現れました。そこで私はありったけの疑問をぶつけました。その中で一番分からなかったのが、外科的矯正治療において、下顎単独後退術に

て下顎を後方に下げる量に左右差のある症例の場合、下顎骨はどのような移動様相を示すのか？と。丹原先生も経験的にはこのくらいかなとアドバイスをくれましたが、なかなか納得していない私を見るに見かねて言いました。「はっきりとしたことはわからないから一緒に研究してみる？」と。しめたものです。この瞬間一人の研究協力者かつ共著者を獲得しました。

以上ざっくりとしたエピソードでした。そこからは、試行錯誤の連続でたくさんの先生方のお力をお借りし、何とか論文を投稿し、受理されました。本番当日までプレゼン内容をブラッシュアップし、講演の日を迎えました。当日は予想してい



たよりもはるかに多くの方が会場にきていて、自分の出番前にもかかわらず早くも口腔内の水分がゼロになりました。緊張しいの私ですが、どうせやるなら聞いてくださる方に分かりやすく飽きずに聞いてもらえるようゆっくり、はっきりと聞き直って講演を行いました。最後に今回の講演は私

にとって非常に貴重なものとなりました。講演を終えてみて自分の臨床研究が大きな学会で認めていただいたことにより、今後の研究に対するモチベーションの向上につながりそのことが一番の財産ではないかなと感じております。



平成29年度新潟歯学会奨励賞を受賞して

歯科矯正学分野 中 田 樹 里

この度、平成29年度新潟歯学会において、奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。今回受賞した演題名は「ROCK阻害剤の骨代謝および矯正学的歯の移動への影響」です。

全身の骨組織は破骨細胞と骨芽細胞が常に均衡を保ちながら働いており、絶えずリモデリングが行われています。一方矯正歯科治療による歯の移動では、歯に矯正力を加えることで歯根膜に圧迫側と牽引側を人為的に生じさせ、圧迫側では破骨細胞による骨吸収が、牽引側では骨芽細胞による骨添加が引き起こされます。このため矯正歯科治療には円滑で効率的な骨代謝が極めて重要であり、薬剤により活発な骨代謝が引き起こされれば、効率的な歯の移動に応用することが期待できます。骨代謝に影響を与える薬剤を探索するために行いました化合物スクリーニングでは、破骨細胞分化を促進する有効な薬剤をいくつか見出しました。その中で分化促進効果の高かったROCK阻害剤は骨芽細胞分化の促進効果もありました。ROCK阻害剤は細胞の運動や収縮に関わる様々な機能をもつリン酸化酵素であり、現在循環器疾患治療薬として使用されているものもあります。ラット頭蓋骨正中欠損修復モデルを作製し、本薬剤の骨形成への影響を解析したところ、骨欠損部の骨形成促進が観察された。また、本薬剤の歯の移動への影響を評価するため、ラット矯正学的歯の移動モデルを作製したところ、局所投与下では

歯の移動促進傾向が観察された。これらの結果から、ROCK阻害剤は破骨細胞および骨芽細胞の分化を促進することで骨代謝回転を高め、骨形成の促進、局所投与による歯の移動促進効果の可能性も示唆された。本研究成果は全身の骨疾患や矯正歯科治療での局所投与において、今後の新たな治療薬の開発につながると期待されます。

本研究では骨組織に関する知識や実験の手技など、一から学ぶことばかりでしたが、いつも丁寧にご指導をいただきました先生方には大変感謝しております。最後になりましたが、歯科薬理学分野の佐伯万騎男教授、柿原嘉人先生、齋藤功教授をはじめとする歯科矯正学分野の先生方ならびにご協力をいただきましたすべての先生方に心より厚く御礼申し上げます。



平成29年度 公益社団法人 日本小児歯科学会 町田賞“優秀論文賞” および平成29年度PEDIATRIC DENTAL JOURNAL優秀論文賞を受賞して

小児歯科学分野 齊 藤 一 誠

論文課題名：

Unilateral open-bite caused by an impacted primary molar with ankylosis: A case report

共著者名：

Issei Saitoh, Satoshi Fukumoto, Yoko Iwase, Haruaki Hayasaki, Youichi Yamasaki

この度、第56回日本小児歯科学会大会および総会におきまして、平成29年度 公益社団法人 日本小児歯科学会 町田賞“優秀論文賞” および平成29年度PEDIATRIC DENTAL JOURNAL優秀論文賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

まずは本賞の趣旨について少し説明させていただきますと、町田賞とは、第5代日本小児歯科学会会長町田幸雄先生からのご寄付を原資とした賞です。小児歯科における特に咬合誘導に関する臨床研究を推奨することで、小児歯科学の研究を盛り上げていきたいとの町田先生のご意志が込められた賞で、今回我々の論文が受賞できたことは大変名誉なことだと感じております。さらに本論文は、日本小児歯科学会の英文機関誌Pediatric Dental Journalより、平成29年に掲載された論文の中で最も優秀な論文として評価をいただき、幸いにも両賞をダブル受賞させていただきました。

小児期の咬合誘導（咬合育成）では、適切な時

期に不正咬合および口腔機能発達不全を診査・診断し、成長発育を考慮しながら治療・対応することで、早期に健常かつ最適な口腔環境へ導くことが重要となります。我々は、骨性癒着のある低位乳歯によって惹起されたと考えられる臼歯部開咬症例について、動的咬合誘導と静的咬合誘導を併用し、悪習癖をコントロールしながら、且つ側方歯の交換時の萌出力を利用し、健全な永久歯列を導きました。本論文は咬合誘導の概念に正に合致し、小児歯科臨床に携わる多くの先生方に参考にしていただけないのではないかと考えております。

末筆になりましたが、本症例の診断・治療・論文作成に多大なご指導・ご尽力を賜りました鹿児島大学山崎要一教授をはじめ東北大学福本敏教授、当分野岩瀬陽子先生、そして平素より大変お世話になっております早崎治明教授にこの場をお借りして感謝申し上げます。



右から早崎治明教授、本人

日本小児歯科学会 平成29年度町田賞 研究奨励賞を受賞して

小児歯科学分野 岩瀬 陽子

この度、第56回日本小児歯科学会大会および総会におきまして、公益社団法人 日本小児歯科学会 平成29年度町田賞 研究奨励賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。

この賞は、我が国の小児歯科において咬合誘導のパイオニアである、元東京歯科大学教授町田幸雄先生の学会へのご寄付を原資に平成26年度に新設された賞です。小児歯科の臨床研究、とくに咬合誘導に関する研究がその対象となっています。小児の咬合誘導に関しては、パイオニアである町田先生も多くの著書で臨床的知見を述べられていますし、もちろん小児歯科学の教科書にも載っている事項ではありますが、昨今、evidence-based dentistryの概念が広がり、それと共にこの分野の臨床的研究はやや縮小傾向にあると思われまます。この賞の創設には、このような現状を憂い、切り開いた道を後進に引き継いで欲しいという願いが込められていると私は解釈しております。私が受賞させて頂いた研究奨励賞は、既に結果が出て発表に至っている町田賞・優秀論文賞や優秀学会発表賞と異なり、研究申請書によって評価される賞であり、今から進める研究に対して与えられるという、他の賞とは少し毛色の異なった賞です。

今回私は「小児における過剰歯の有無が歯列形態に与える影響」という課題名で受賞させて頂きました。今まで過剰歯に関連する基礎的研究も行ってきましたが、その理由として、小児歯科の

日常臨床において遭遇する機会が多く、廃棄される運命にありながらも比較的簡単に健全な歯髓細胞が採取できるというメリットが挙げられます。そして、同じ素材を用いて臨床的な研究へと広がりを持たせる研究が今回の受賞課題です。

基礎から臨床まで幅広く紐解いていくことで、咬合誘導だけでなく広く小児歯科臨床に貢献できるよう、本研究を遂行したいと思います。最後になりましたが、平素より多大なるご指導・サポート下さいます当科早崎教授ならびに医局員の皆様に深謝いたします。



第15回日本歯科医学教育学会優秀論文賞

歯学教育研究開発学分野 佐藤 拓実

この度、日本歯科医学教育学会雑誌に投稿した論文「研修歯科医の臨床技術修得における力のコントロールに関する研究」が第15回日本歯科医学教育学会優秀論文賞を受賞し、第36回日本歯科医学教育学会総会および学術大会にて表彰を受けましたのでご報告申し上げます。本論文では、歯科治療時に術者が患歯、あるいは患部に加える力の大きさを計測、解析することで、研修歯科医が臨床研修を通じて力のコントロールを学ぶことを検証しました。内容は、実習用ファントムに連結した計測デバイスを用いて、ポケット検査、歯肉圧排、SRP、抜歯、FMC装着、義歯印象を行う際に研修歯科医がマネキンに加える力の大きさを記録し、研修初期（6月）、研修後期（2月）の変化を調査したものです。結果として、抜歯や義歯印象など比較的大きな力を要する処置について変化が認められ、研修初期と後期では後期の方が扱う力の幅が大きくなり、各処置に対して明確に力を使い分けるようになったことが示されました。

歯科治療は長らく経験の上に成り立つものでした。しかしながらEBMが提唱されて以来、歯科界においても治療の科学的裏付けが叫ばれるようになりました。また、他方では「腕のいい歯科医師に診てもらいたい」という患者のニーズも高まっているように感じられます。このような状況にあって、歯科治療の成否、また治療技術の巧拙

について客観的評価、また量的評価を行う方法は確立されておらず、多くは主観的、あるいは質的評価に留まっているのが現状です。当分野では上記のような評価法や手技、またそれらの教育方法について研究を行っています。

昨年度の第14回日本歯科医学教育学会優秀論文賞も当分野の奥村暢旦講師が受賞しており、2年連続の同大学・同分野からの受賞ということで、大変誉れ高く感じるとともに今後の大きな励みになっています。

最後に本論文をまとめるにあたり、指導教員である藤井規孝教授を始め、歯学教育研究開発学分野の先生方に多大なご指導を賜りましたことにつきまして、心よりお礼申し上げます。



平成29年度 新潟歯学会学術賞 受賞報告

う蝕学分野 枝 並 直 樹

この度、「ラット臼歯断髄後におけるMyofibroblastの動態解析」の演題において平成29年度の新潟歯学会学術賞を頂くことができましたので、ご報告をさせていただきます。

今回私たちは、Myofibroblastと呼ばれる細胞に着目して歯髄創傷治癒過程での動態を検索しました。この細胞は1970年代より皮膚の創傷治癒時または心臓、肝臓、腎臓、肺等の病的線維化時に細胞外基質の産生に関与する細胞として知られてきました。歯髄の創傷治癒すなわち修復象牙質形成時も、細胞外基質産生は、その主体をなす反応でありますので、同様にMyofibroblastが関与しているのではないかと仮説を立てました。

幸いう蝕学分野には、ヒトはもちろんのことラットの歯科処置も名医である吉羽邦彦先生がおりましたので、先生からのご指導により、小さなラットの臼歯でもヒトと同様の処置が可能となり、多角的に研究を行うことができました。

その結果、免疫組織学的解析からはMyofibroblastに特徴的な α -SMAと呼ばれるタンパク質の陽性細胞が修復象牙質形成の直前に増加していることが確認されました。また経時的な遺伝子発現解析から α -SMA陽性細胞の出現に先立ち、Myofibroblastの分化誘導因子として知られるTGF- β 1およびEDA-fibronectinの発現が一過性に上昇していることがわかりました。これらは、歯髄創傷治癒においてもMyofibroblast様の細胞が関与していることを示唆しています。

近年では、より有効な歯髄保存療法開発のため成長因子を応用する等の生物学的アプローチが多数検討されています。今回明らかになったMyofibroblast様の細胞は生物学的アプローチを検討する上で標的となりうると考えられ、新たな治療法開発への発展が期待されます。

私事になりますが、今回、高校生の時からの同級生である中田樹里先生と同時に賞を頂けましたことをとても嬉しく思っています。今後も協力でき、刺激となる関係を続けさせていただきたいと思っておりますので、中田先生、どうぞよろしくお願いたします。

最後になりましたが、厚いご指導をいただきました野杵由一郎教授ならびに吉羽邦彦・永子先生を始めとしたう蝕学分野の先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。



第30回日本顎関節学会総会・学術大会 最優秀ポスター賞

顎顔面口腔外科学分野 大学院4年 中谷暢佑

第30回日本顎関節学会総会・学術大会（2017年7月29-30日、横浜市）で、最優秀ポスター賞をいただきました。演題名は「セロトニン再取り込み阻害薬は繰り返しストレスにより咬筋の侵害受容反応の増強を抑制する」です。

私たちは、日々さまざまなストレスにさらされています。そんな時、頭が痛い、肩が痛い、顎が痛い、歯が痛いなどを感じたことのある方は少なくないと思います。これまでの研究により、ストレスは痛みを引き起こすことがわかっています。そして痛みのメカニズムは、痛みを処理する脳機能の変調が考えられています。私は、縁あって一昨年より口腔生理学分野で岡本准教授に師事し、心理ストレスが顎関節部の痛み反応に影響を与える脳メカニズムを研究しています。具体的には顎顔面領域での痛みの伝達処理に関与する三叉神経脊髄路核尾側亜核（通称Vc）を対象に、痛みに対するストレス効果を形態学的、行動学的手法を用いて検討しています。今回の発表では、ストレスはVc領域の興奮性を増大させることで、咬筋の侵害応答を増強すること、増大した咬筋侵害応答は、抗うつ薬（セロトニン再取り込み阻害薬）

によって改善されることを解明しました。これらの所見は、ストレスが脳内セロトニン機構を変調させ、顎顔面部の痛みを増強させることを示唆します。私たちは本研究成果の一部をExperimental Brain Researchに発表しました。今後もこれらの実験をより発展させることで、治療が困難な慢性疼痛に対する有効な治療法の開発につながればよいと思っています。

最後になりましたが日々多大なるご指導をいただいております口腔生理学講座 岡本圭一郎准教授、黒瀬雅之先生、山村健介教授、そして顎顔面口腔外科学分野 高木律男教授にはこの場をお借りしまして深く感謝申し上げます。



日本口蓋裂学会 優秀ポスター賞受賞報告

歯科矯正学分野 市川 佳 弥

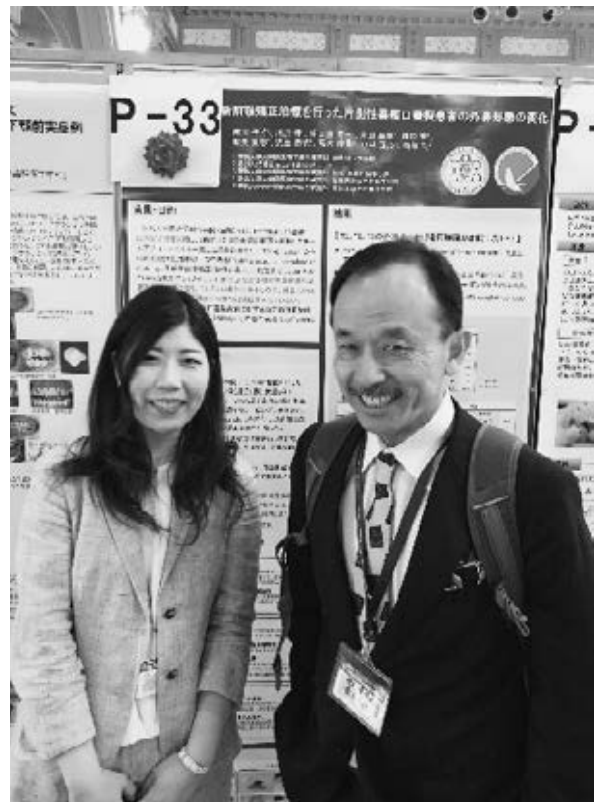
2018年5月に大阪で開催されました、第42回日本口蓋裂学会総会・学術集会にて優秀ポスター賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。演題は「術前顎矯正治療を行った片側性唇顎口蓋裂患者の外鼻形態の変化」です。

当院では、1973年より口唇裂・口蓋裂治療を開始し、1991年には口蓋裂診療班を組織してチームアプローチによる総合診療を行っています。2008年からは術前顎矯正治療のひとつであるPNAM (presurgical nasoalveolar molding : 術前鼻歯槽矯正) 治療を導入し、現在までに52症例のPNAM治療を行ってきました。これまでもPNAM治療が外鼻形態や歯槽形態の改善に有効であるとの報告はあるものの、外鼻形態に対する治療効果を裏付ける科学的根拠は報告されていません。そこで今回、術前顎矯正治療を行った片側性唇顎口蓋裂症例の初診時から口唇形成後までの外鼻形態の経時変化について、顔貌写真を用いて術前顎矯正治療を行っていない症例と比較・検討することで、PNAM治療の有効性を明らかにすることとしました。

分析を行った結果、術前顎矯正治療は口唇形成前までに鼻柱および鼻翼の偏位を改善することで口唇形成時の組織移動量を軽減できること、また口唇形成後の鼻翼基部の偏位の改善に有効であることが示唆されました。今回の結果からPNAM治療は外鼻形態の改善に有効であると言えますが、それだけではなく治療に通っていただくこと

で保護者の方の心のケアにもなると実感しています。まだまだ課題は沢山ありますが、今回の受賞を励みに今後の臨床、研究に従事していきたいと思えます。

本研究にあたりご指導を賜りました齋藤功教授、丹原惇先生、臨床を支えていただいております口唇口蓋裂診療チームの先生方、衛生士・看護師のみなさまにこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。



Receiving the “Poster Excellence Award” in the Japan Prosthodontic Society Conference 2018

Division of Bio-Prosthodontic, Graduate School of Medical and
Dental Science, Faculty of Dentistry, Niigata University.

Farah Ali Al-Omari

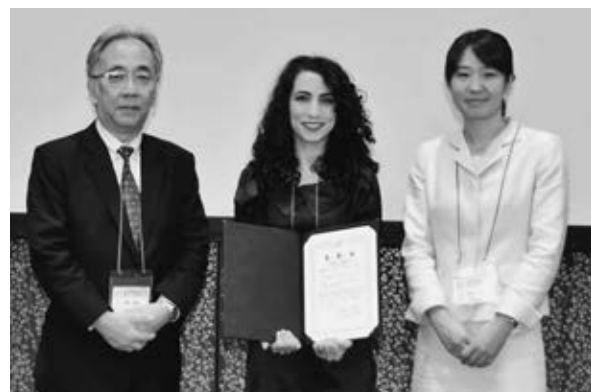
It’s a honor to announce that I have received the “Poster Excellence Award” for the research theme under the title of “The Influence of abutment Screw tightening on Marginal Bone of Dental Implant” in the 127th scientific conference of the Japan Prosthodontic Society which held in Okayama city, June 15th-17th, 2018.

The research investigates the effect of abutment screw high tightening torque and preload stresses on marginal bone around osseointegrated implants over long-term in an animal model. While marginal bone resorption around implants by the occlusal loading force has been investigated in-vivo and in-vitro, the effect of abutment installation itself without the application of occlusal loading forces has not been studied yet. Recently, we are planning to expand the research by include more groups in order to explain and answers multiple clinical questions.

It was a great opportunity to participate in prosthodontic society conference this

year. I had the chance to encounter many researchers to discuss and receive many questions regarding my research, which gave me an insight toward future plans and researches. So, it’s worth to mention that I was so surprised almost shocked that I received the excellence award for my research work which has been presented by a poster. The ambition and energy which felt after receiving the award was a great drive to work harder and to achieve more through my career years.

During the preparation for the conference, I have received support and guidance from our professor Katsumi Uoshima, my supervisor doctor Masako Nagasawa, my team, my department members, and my professor back in Jordan Ameen Khraisat, whom I owe my sincere appreciation and gratitude to all of them. I am honored to work and to have many chances to learn from the researchers and members who belong to our department. It will always be one of the greatest steps in my career as researcher and dentist.



日本補綴歯科学会第127回学術大会 優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞） 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 真柄 仁

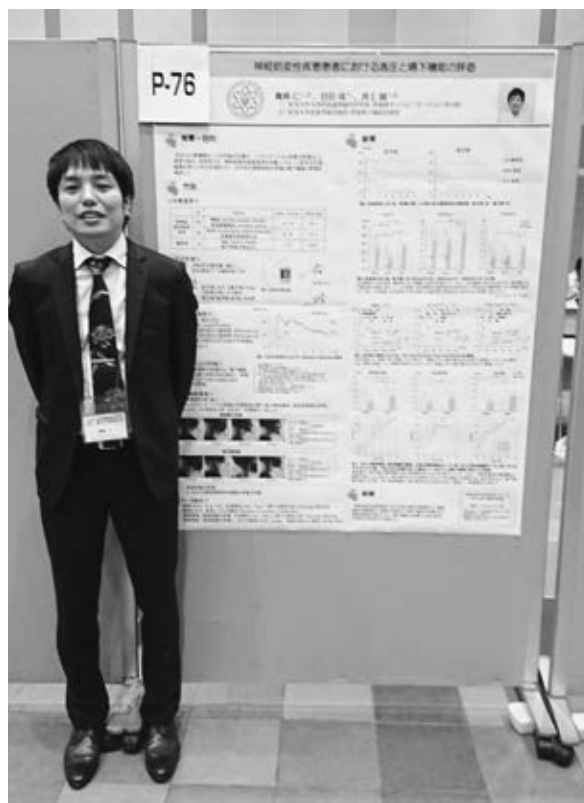
日本補綴歯科学会第127回学術大会（平成30年6月15-17日、岡山にて開催）において、優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞）に選出いただきました。今回の受賞演題名は、「神経筋変性疾患患者における舌圧と嚥下機能の評価」と題し発表したもので、少し内容を紹介させていただきます。

神経筋変性疾患では、主に中枢神経系の特定領域が疾患特異的かつ進行性に侵され、その症状は疾患ごとに異なります。今回、錐体路の変性が生じる筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者、小脳変性や自律神経系の変性が生じる多系統萎縮症（MSA）患者を対象に、嚥下造影検査結果を評価した嚥下機能と、舌圧を評価した口腔機能の関連についての観察研究を行いました。舌圧計測は、通法に加えて後方部（硬口蓋後方部）においても行いました。結果、ALS患者では、健常者やMSA患者に比べ舌圧が有意に低いこと、ALS、MSA患者は健常者に比べ舌圧発揮の持続が困難であることが明らかとなり、さらに後方部の舌圧から食塊の咽頭残留や、液体誤嚥を予測できる可能性があることを示しました。

嚥下障害の臨床は、医師をはじめ、看護師、療法士、社会福祉士、介護士、歯科医師、歯科衛生士など多種職によるアプローチが求められます。その中で、口腔機能を評価し、常に考慮をすることが嚥下障害の臨床に関わる歯科医師としての重要な責務であると感じております。本受賞に際し

では、そのような一側面も評価頂いたものとも感じております。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました新潟大学大学院摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授、新潟大学脳研究所神経内科の先生方をはじめ、データ収集に御尽力頂きました同医局スタッフの先生方、御協力に御理解を頂きました患者様にこの場をお借りして感謝申し上げます。



2018年度 日本病院薬剤師会学術奨励賞 新潟県病院薬剤師会学術奨励賞

新潟大学医歯学総合病院薬剤部 顎顔面口腔外科学分野 吉田 謙 介

はじめまして。新潟大学医歯学総合病院薬剤部に所属しております、吉田謙介と申します。現在、東3階病棟専任薬剤師として歯科医師の先生方と一緒に仕事をさせて頂きながら、社会人大学院生として顎顔面口腔外科学分野で臨床研究を学ばせて頂いております。

この度、2018年度日本病院薬剤師会学術奨励賞および新潟県病院薬剤師会学術奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。演題名は「ICT介入による予防的抗菌薬の変更が口腔外科手術におけるSSI発生率と医療費に与える影響」です。

これまで新潟大学医歯学総合病院歯科領域の口腔外科手術では予防的抗菌薬として、経験的にセフトリアム（CTM）が使用されておりましたが、院内感染制御チーム（ICT）が2011年7月に介入し、セファゾリン（CEZ）へ変更となりました。今回、予防的抗菌薬変更による手術部位感染（SSI）発生率と医療費への影響を評価することを目的に調査を行いました。その結果、対象患者1,081名中で、SSI発生率に差はなく、一人当たりの平均投与費用は9,946円から2,169円へと減少し、SSI発生阻止率から算出した費用対効果比は

10,016.3から2,204.5に改善されておりました。

今回の受賞は、薬学の領域において未だ報告の少ない歯科領域において、歯科医師の先生方と協同することで抗菌薬適正使用化に繋がったことを発信する良い機会になったと考えております。また、こうした研究を薬剤師の視点から継続し、医療の現場へ貢献できるように尽力したいと思っております。

最後になりましたが、本研究遂行にあたりご指導を頂きました顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授、児玉泰光先生、西川敦先生ならびにご協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。



【お詫び】

2018年4月発行「歯学部ニュース平成29年度第2号（通算132号）」の学会受賞の栗原加奈子様の記事にて、タイトル記載の誤りがございました。

誤 …………… 日本感染症学会東日本地方会奨励賞受賞報告

正 …………… 第76回（公社）日本矯正歯科学会学術大会優秀発表賞を受賞して

修正させていただいたものを次頁に掲載させていただき、大変恐縮ではございますが、著者の方、読者の方ならびに関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

第76回(公社)日本矯正歯科学会学術大会優秀発表賞を受賞して

歯科矯正学分野 栗原 加奈子

この度、2017年10月に札幌で開催された第76回日本矯正歯科学会学術大会にて優秀発表賞を受賞致しましたので、ご報告致します。

演題名は『成人前歯部開咬症の嚥下時舌突出が舌圧発現様相に与える影響』で、口演発表をさせていただきました。研究内容の概略は、前歯部開咬症は、上下顎骨や上下顎歯列弓の垂直的な異常として認められ、嚥下時に上下顎歯列による口腔前方部の閉鎖を行うことができず、健常者と異なる舌動態を呈することが推測されます。さらに嚥下時舌突出を伴う場合があり、その習癖も舌動態に影響すると考えられます。そこで、厚さ0.1mmの舌圧センサシートを用いて、前歯部開咬症の嚥下時における舌突出が舌圧発現様相に与える影響を検討しました。その結果、嚥下時舌突出を認める前歯部開咬症の舌圧は、口蓋正中中央部から後方部で弱く、舌圧波形は多様性に富み、健常群と異なることが示唆されました。今後は舌圧のみならず、口唇や頬部の動きも探索し、それらの協調性を評価することで、さらに深い考察ができると考えております。

さて、札幌には7年間住んでおりましたので、10月の札幌の寒さは承知していたつもりでしたが、飛行機から降り立った途端、肌に突き刺さるような寒さに発表前の緊張がより一層高まりました。ですが

同時に、見慣れた風景に後押しされている感じもありました。発表前には、たくさんの方から激励の言葉をかけていただき、また当日も、壇上から医局員の先生をはじめ、同門の先生が聴衆席にいらっしゃるのがわかり、大変心強く発表に臨むことができました。

このような大変貴重な機会を与えてくださり、またご多忙にも関わらずご指導を賜りました齋藤 功教授、福井忠雄先生、坂上 馨先生をはじめとする歯科矯正学分野の先生、包括歯科補綴学分野の小野高裕教授、堀 一浩先生、ならびにご支援いただきました同門の先生には、心よりお礼申し上げます。

今後日々精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

